

言文一致の語彙的基盤について

— 日中の場合

沈 国 威

一、言文一致をめぐる

日本語の近代は、明治中期の文語文から口語文への移行から始まった。この「言文一致」という名の言語事象は、一体何だろうか？文字通りに理解すれば、「言」＝口頭言語と「文」＝書記言語が一致している言語行動、或いはそれを追求し、実現させようとする努力ということになるだろう。一般的には日常の話し言葉に近い口語体を用いて文章を書く、つまり口語から口語文へ（口語→口語文）という理解が主流のようだが¹⁾、文語文を口語文に近づけさせようとする、つまり文語文から口語文へ（文語文→口語文）という意味（ダウングレードの意味合いがあるが）のほうがこの本質に近いように思われる。言い換えれば、これまでに文章が書けなかった人たちに自分の発話を文字によって記録する能力を与えるというより、今まで文語のみで書かれた文章をより口頭言語に近い形で書く心構えと技術ということである。さらなる考察のためにここではまず用語を筆者なりに整理しておきたい。

- 話し言葉＝音声言語、口語とも言う；
- 書き言葉＝書記言語、文章語とも言う。これには文語文と口語文の両方を指す可能性がある；
- 文語文＝古典、或いは古典をベースに作成する文章；

- 口語文＝口頭言語に近い文章；
- 発言＝言語の口頭表出；
- 聴解＝聴覚による発話内容の理解；²⁾

ところで、言文一致というパラダイムシフトには、次のような3つの側面があると思われる。つまり(1)一般民衆(国民)の書記言語(国語)の獲得；(2)科学を語る(以下、科学叙述と呼ぶ)ことの実現；(3)言語形式に束縛されずに自由に思想、感情を表現することの可能性；である。日本語の言文一致について、従来の研究では、(3)のほうに、つまり文体論、文法論(特に文末形式)に研究者の関心が集中しており、数多くの卓見が発表されている。また近年になって(1)も注目されるようになったが、(2)については明確な問題意識がないまま現在に至っている観がある。ここで言う「科学叙述」とは、その最も典型的な場合は、教室といった空間で、自然・人文科学の知識を講述する教師と耳で聴いて(場合によっては目で教科書を追いながら)理解する学生によって構成された言語活動を指す。つまり「言」と「文」は、第一義的に下記のことを指すであろう。

- 口語＝教室での言語活動
- 文章語＝教科書の文章

このような従前なかった言語活動を、筆者は「科学叙述」と仮称する。科学をめぐる「講述」と「聴解」の緊張関係こそ、言文一致の最も本質的な部分であると考ええる。

近代国家の誕生には必ず国語の形成を伴う。国語は、国民1人1人のものであると定義された場合、その意味するところは、基本的な学習(義務教育)を終えた段階で、誰もが現代社会を生きるのに支障を来さない程度の国語力を身につけることが可能であるということである。これは、もち

ろん理想論ではあるが、少しでも近づけようとする努力が近代国家に求められるのである。言文一致は、このような理想的な状態を達成するステップであり、装置である。何故ならば、言語能力は、社会的格差を作り出すものであり、「言」と「文」の距離が大きいほど、文章力の獲得が難しく、長期間の訓練が必要であるため、近代以前では経済的な理由等により、殆どの人が排除されたからである。

なぜ近代以降、言文一致が叫ばれるようになったのか。形式に束縛されずに自由に心情を吐露するという文学からの要望はもちろん重要ではあるが、文学より科学の要因がもっと大きいと考える。明治期に入り、学制が一新し、近代社会に必要な科学の常識が教育内容の根幹として加わった。このような内容の刷新に応ずるべく、言語形式の革新が求められるのである。

このように言文一致は、近代の文学事件というより、民衆啓蒙の事件と見たほうが事実に近いと考える。これが本稿の基本的な立場である。日本と中国において科学叙述を可能にした語彙的基盤がどのようなものかを探るのが本稿の目的である。

それでは、まず言文一致の歩みを日本と中国を別々に見ておく。

明治20年代に入ってから、文学者が中心となって文章の改革運動が起こった。言文一致小説の嚆矢は、坪内逍遙に刺激を受けた二葉亭四迷の『浮雲』（1887-1889）であったが、口語文の小説が主流になったのは20世紀に入ってからのものであり、国民的文豪、夏目漱石の登場を待たなければならなかった。1904年第一次国定尋常小学読本の中で口語体の文章が大幅に増加して、学校教育を通じて、口語体が一般社会に広がったが、マスメディアでは雑誌『太陽』創刊年（1895）の口語記事は5%しかなく、新聞等で口語記事が優勢を確立したのは大正の末期であった³⁾。

一方、中国では、1916年蔡元培、黎錦熙らが国語研究会を立ち上げ、「言文一致」「国語統一」を提唱する。国語統一運動にとって、中国に数多くあ

る方言を1つのより広く通ずる言葉に統一させようとするのが喫緊の課題である。「国語」の実現は、日本よりずっと多くの困難を抱えているのである。折しも胡適が『文学改良芻議』（1917）を発表し、「文学革命」を呼びかけた。1919年、中国最初の白話小説、魯迅の『狂人日記』が刊行されるや、白話か文言かは、新旧文学の分水嶺となった。このように「言文一致」と「国語統一」の2つの流れが1つに合流し、民衆啓蒙と教育普及にインパクトを与えた。

言文一致は、日本では、近代文学の発生、成長に大きな貢献をした。研究者の注意も文学に注がれる所以である。言語の側面からの研究は、演説体の成立、共通語の基盤である東京語の形成、敬語、活用や助辞等の文法事項、文末表現が中心であった。対して中国では、方言の統一、漢字改革、ローマ字化、文体の口語化、白話小説や新体詩の可能性などが議論の重点であった。

言文一致の研究では、日中とも大きな成果を上げた。しかし、現状を見れば、日中どちらも言文一致に関しては、文学、文体論を中心に研究が展開されている。同じく近代的身が成し遂げられた語彙は、言文一致の実現にどのように貢献したのかという視点からの考察がまだ少ない。文章は段落、段落は文、そして文は個々の語をもって構成されるということを考えれば、言文一致は、語彙的基盤の上に成り立っているということは当然の帰結であろう。研究に関してもこの視点からのアプローチが可能である。否、むしろ必須であると考ええる。

本稿は、日本語と中国語を中心に語彙の役割を考えていくが、東アジアに及ぶ問題であるので、韓国、ベトナムの研究も期待するものである。

二、言文一致の「文」

江戸時代では、文章といえば漢文になる。漢文は唯一の学術言語であって、蘭学も、漢文でオランダ語を翻訳することになっていた。文章語にお

けるダイグロシア（二言語併用）は日本のみならず、朝鮮半島、ベトナムを含む漢字文化圏の常態であった。明治期に入って、近代日本語の書記言語の確立は、脱漢文のプロセスであるが、また皮肉にもこれは同時に和文脈に漢字語を最大限に増やすプロセスでもあった。（後述）

一方、中国では、詩文と言ひ、漢詩も含まれるが、文章は、道を載せる道具である。作成するには特別な訓練が必要である。科挙の八股文が極端に形式化し、作者の感情どころか、主義主張も自由に表現できない、死の文字と化した。1905年に科挙が廃止となり、新しい学制が確立された。20世紀の最初の十年は、中国社会の前近代から近代への過渡期と言われるが、言語は最も敏感に社会の変化を反映するもので、1911年清王朝が滅び、新時代を迎える中、文章革命の気運が高まった。

胡適は、1916年10月陳独秀への私信で文学革命の8項目を提案し⁴⁾、1917年初頭『文学改良芻議』と題して正式に発表した。胡適の論文は、白話運動の狼煙を上げた出来事として広く論争を巻き起こした。胡適は、万悪の根源は「文勝質」と主張していた。「文」は、形式、「質」は胡適は「精神」と呼び、即ち文学の内容である。但し実際には、胡適の「文」は、文学形式（genre）と言語形式（language form）の両方を兼ねている。例えば第三項で言及された駢体文、旧体詩は文学の形式で、典據、白話、文法などの項目は言語の形式に属している。このように胡適の「形式上の革命」は、古い文学形式の打破と新しい言語形式の構築という2つの側面が備わっている。胡適は、当時の古い文学は、形式的であろうと内容的であろうと、新しい時代に適応できず、革命を起こす必要がある。そして古い文学を変えるには、内容の革新のみならず、語彙を含む新しい言語の形式も創出しなければならないと感じ取ったのである。

陳独秀は、胡適への返事の中で、はじめて「文学之文」と「応用之文」という区別を打ち立てた。しかし文学の文章とは何か、応用の文章とは何か、その言語形式はどのようなものかについて詳細に論じることはなかつ

た。「文学」という語は中国の典籍に見え、19世紀以降、また西洋の literature に出会い、多くの議論を引き起こした⁵⁾。「文学」は、どのような内容を含むか、その言語的な特徴はどのようなものかといった議論が当然あってよいものである。章太炎は、「何以謂之文学？以有文字著于竹帛，故謂之文；論其法式，謂之文学」と指摘している。「文学」は「文之学」である。章氏はまた「文即詩賦、筆即雜文」と「文と筆」の区別に言及している⁶⁾。内容より形式（genre）に重きを置いていることが分かる。

章太炎の弟子、胡以魯はその著『国語学草創』（1913）の終章、「九 論国語與国文之關係」で、「質文建設」を提案した⁷⁾。いわゆる「質文」は、応用を中心とした文章のことである。胡以魯によれば、言文一致は、一朝一夕で実現できるものではない。かといって、教育の普及は、従来の国語では効果的に行えるものではない。胡以魯は一時しのぎの方法として、口頭言語に近い「質文」を提案し、義務教育の実際使用に供しようとした。標準発音提案と共に出されたこの提案は、以下のような内容である⁸⁾。

- 使用漢字を 2000 前後に制限する。その発音と意味は、現在一般的に行われるものに従う。まず教科書で使用し、その後、全国普及を図る。
- 漢字を意味別に整理し、発音も統一させる。難しい文言の虚辞は、簡単な同音字を用い、話し言葉に近づける。
- 同音異義語と異音同義語を話し言葉に基づき整理する。
- 当て字などは、話し言葉にないものは、廃棄する。古語では品詞を兼ねるものは、現在の話し言葉に従い、整理する。
- 新しい事物の名称や新しい思想を表す語彙、できるだけ複合語を用い、新しく漢字を作ってはいけない。外国語を意識の形で取り入れ、日本人が作った意識語は、中国語として通用するものは使い、通用しないものは改める。

- 代名詞や古典的な表現は、常用語以外は、廃棄する。
- 古典的な待遇表現、慣用句などを廃棄する。

「質文には漢字が2千字あれば十分」という主張は明らかに章太炎の影響である。胡以魯の提案は、文字から発音、語彙など多岐にわたり、示唆に富むものであったが、実質的な討論を待たずに、氏は1917年夭逝した。

1917年2月、陳独秀は、『文学革命論』を発表した。文学の文は、美麗句や媚びへつらう貴族文学を追放し、平易で、叙情的な国民文学を樹立すべし；陳腐で、誇張的な古典文学を打ち倒し、新鮮で、誠実な写実文学を樹立すべし；難解で、意味不明な風景文学を打ち倒し、明瞭で、通俗的な社会文学を樹立すべしと呼びかけた。陳氏は、当時の文章の現状に「文学の文は、もはや見るものがなく、応用の文もまた怪しい」と酷評している⁹⁾。応用の文の例として、陳独秀は、墓誌銘や一般の案内文を挙げた。

ほどなくして、北京大学教授の錢玄同氏が論戦に加わった。錢氏は「胡適の典拠を用いずという主張は、最も素晴らしい。それによって千年以上の陳腐な文学を一掃することができた」と述べている。また、「文学の文は、典拠を用いるだけで劣悪なものとなり、応用の文は、ありのままに話し、老婆も分かるようにしなければならない」と指摘している。ただし、言文一致が応用の文の必須条件であると主張するも、具体的にどうすればよいかについては、「いま述べる暇がなく、後日に別文を書く」と述べるにとどまっている¹⁰⁾。だが、結局書くことはなかった。

次に登場したのは、同じく北京大学教授の劉半農であった。劉氏はまず文学という概念を定義してみせる¹¹⁾。彼は、まず「文以載道」という陳腐な説に反対し、また「文章は美を飾る」目的があるという意見にも同意しないと宣言した¹²⁾。劉半農は、ほかの説より、章学誠の「文史の別」のほうが事実に近いと指摘している。しかし、出来事を記録する文章を全部「史」に入れると、文学の上で重要な位置を占めている小説の類いも文学と

見なされなくなる。一方、書簡、布告などの非出来事記録の文章を文学に入れるのも問題である。というのは、書簡のような文章は、理解できればよいのだが、文学として扱われれば、潤色を施さなければならない。これもまた蛇足だ。劉半農は、「世界的に認められるように、文学は、美術の1つだ。」西洋の原則に従えば、すべての作品を、「文字」(Language)と「文学」(Literature)に分けるべしと主張した。氏によればLanguageの定義はAny means of conveying or communicating ideas.であり、即ち「文字」は、意思を伝えるだけでよく、言外の意味を付け加える必要がない。孔子の「辞達而已矣」を意識した発言のようだ。またLanguageは、Speech(語言)、Tongue(口語)とは、微妙な差があるが、大体置き換えが可能である。即ちLANGUAGE is generic denoting, in its most extended use, any mode of conveying ideas; SPEECH is the language of sounds; and TONGUE is the Anglo-Saxon term for language, especially for spoken language. 文字は、「語言」、或いは「口語」の上位概念で、二者は、本質的な区別がなく、いずれも自分の意思を他人に伝えることを目的としている。違いがあると言えば、それは、「文字」は「語言」、或いは「口語」と異なり、時間と空間の制限を受けないと言うことである。正に孔子の「言之无文、行而不遠」であると¹³⁾。一方、Literatureについては、西洋での定義は、The class of writings distinguished for beauty of style, as poetry, essays, history, fictions, or belles-letters. したがってLiteratureは、「語言」或いは「口語」の代表格である「文字」とでは、異なっている存在である¹⁴⁾。

「文字」と「文学」がはっきりと定義された後、答えなければならないのは、「どこに文字を用い、どこに文学を用いるべきか、またどうすれば文字を作成でき、どうすれば文学を作成できるかということである。この2つの問いに、劉半農は、次のように答えている。

陳独秀のように「文学の文」と「応用の文」を対立させるならば、論理

的に「文学の文」は「応用の文」であり得ず、「応用の文」も「文学の文」であり得ないことになり、これは同意できない主張である¹⁵⁾。「文学」の役割に対する西洋の定義は、Literature often embraces all compositions except these upon the positive sciences. この定義は、まだ陳独秀のより幾分よいだろう¹⁶⁾。但し、劉半農は、同時に「実証科学 (positive sciences)」以外のすべての文章をことごとく文学に入れることに問題があると考えていたようだ。例えば西洋では「哲学」は、実証科学ではないが、「科学の一分野」である。哲学自身はすでに難解で曖昧な意味合いを含んでいるので、その文章は、極力分かりやすく、読者は簡単にその趣旨を理解できるようにしなければならない。また胡適、陳独秀、錢玄同諸氏、及び劉本人の文章は、文学を議論するものであるが、すべて「文字」の範囲に入れなければならない。というのは、「文学自身もまた科学の一分野」で、客観的に討論しなければならないからである。劉氏は、科学に関係する文章なら、実証的 (positive) か否かにかかわらず、すべて「文字」に分類し、文学の領分を侵すべきではないし、その逆も文学の範囲を広め、「文字」の領分を侵してはいけないと主張している。「文学」と「文字」の相違について、劉半農は次のように捉えている。

- 文字：科学上のすべての応用の文章；
- 文学：必ず文学に入れないといけないものは、詩歌戯曲、小説散文、歴史伝記の3種類に過ぎない。(実は、歴史、伝記を文学に入れるのは、中国と諸外国の慣例で、両者とも具体的な科学であって、文字に入れたほうがよいが) 社交的な文章 (献辞、頌辞、追悼文、墓誌銘など) は、すぐにはすべてを排除できないが、いずれ現実主義が発達すれば、このような文学の老廃物はおのずから淘汰される運命にある。従って一步進んで言えば、文学上、永久の資格と価値のあるものは、詩歌戯曲

と小説散文のみである。

つまり、応用の文について、劉半農は表現、伝播上の平易性をもっとも重視しているのである。劉氏は、中国古代の「科学書」に読者を困らせ、わざと分からないようにするものばかりだ、中国で学術の発展、普及が遅れているのは、ことばの難解さに起因するものかも知れない、嚴復の『英文漢詁』（1904）は英文法の入門書に過ぎないが、難解な文言を使っている、このような書物を教科書にすれば、生徒はまず十数年古文を勉強しておかなければならないと非難している。

創作上、「文字」と「文学」はどう違うかについて、劉半農は、次の3点を指摘している。

- 一、「文字」は、文法と同時に論理学も重んじるのに対して、「文学」は文法のほかに論理学と修辞学も重んじるが、論理学より、修辞学のほうが大事であろう。
- 二、「文字」は、「精神」に関係しないので、過度な修飾は要らない。一方「文学」は、「精神」に大いに関係するので、作者は言語的手段を使い、自分の思想、感情等の内面を文章に表現しなければならない。
- 三、新しい時代には、新しい語彙が必要で、一部の新語、例えば「手続、場合」などは、分かりにくいし、「目的、職工」などは中国語に対応できる既存語がないわけではない。だが、「文字」の範囲内なら、便利だし、頻繁に使用されているので、状況に応じて採用してもよい。しかし「文学」の語彙は、美しい、上品であることが大事で、わかりにくい新名詞の使用を避けるべきである。西洋の文学の中でも学術用語の使用は少ない。

続いて、劉半農は、散文改革の中で、文言と白話は、しばらくの間、対等な地位にあり得ると指摘している。その理由は、両者はそれぞれ長所、短所があり、片方を切り捨てることができないからである。いわゆる片方を廃棄できないとは、間髪入れずに文言を排除することができないということである。劉は「白話は文学の基本」、「白話は文章が進化した結果」といった胡適、陳独秀、錢玄同ら諸氏の主張は、全くその通りで、疑う余地がないとしつつ、その一方、白話は、文言に及ばないところもあり、文言を廃し、白話を採用することは一挙に成し遂げられるものではないとし、目下の任務は、文言を分かりやすさを増し、白話に近づけると同時に、白話は、元々ある長所を伸ばし、更に文言の優れた点を取り入れるべきだと力説している。劉半農は、厳密で上品な語彙があることは文言の長所で、一字一字の意味が多岐にわたり、文脈に依存するし、品詞の転換もできないことは文言の欠点であると指摘している¹⁷⁾。劉は、応用の文をどのように書けばよいかを提示しなかったが、文章と使用語彙の関係を強く意識していたことが窺える¹⁸⁾。

日本では、日記、速記、新聞記事、翻訳文、写生文など文体に関する分析があるが、文学の対立項としての統一した視点からの討論は管見では把握していない¹⁹⁾。

筆者は、応用の文章は、その内容は、科学であることをはっきり認識しなければならないと考える。もちろん、科学と言っても専門書ではなく、教科書に採用されるような科学の常識を語る文章である。

三、言文一致の「言」

「言」は、音声言語である。言語は第一義的に音声である。音声言語も、書記言語と同じく種々の形式が存在し、文字のない時代と文字のある時代を考えれば、次のような種類があげられる。

- **会話**：日常的なコミュニケーションは言語の最も基本的な機能であろう。時代によって支えられている内容があるが、理解の障害になるのは、異文化の大規模の伝来と社会形態の転換期だけか。「問今是何世，乃不知有漢，無論魏晉（問ふ、今は是れ何れの世ぞと。乃ち漢有るを知らず、魏・晋に論無し）」（陶潜『桃花源記』）からみれば、桃源郷の住民は、侵入者の漁夫と意思疎通を問題なく行った。しかし仏教伝来や或いは西学東漸によって知識が一変した後、国民同士とはいえ、話しが通じる保証はない。²⁰⁾
- **祈り、口伝（口頭伝承、語り部）**：言語行為としては文字のなかった時代から存在していたが、文字が発生してから記録媒体に記録される際、潤色、加工が加えられたと考えられる。
- **講話（説話）**：話芸としての講話は、口頭形式が先行することは疑いの余地もなからう。但し白話小説へと加工されていく過程で、洗練され、書面語の要素が多く加えられた。
- **演説（公的発言）**：以下の点で、日常の会話と区別される。（1）まず書面で準備される場合が多い。（2）内容も政治経済、科学技術の話題が中心で、非日常的なものである。（3）不特定多数に向けて発せられる。²¹⁾
- **講義**：教室での言語活動で、その内容は、シラバスによって規定される。

文字記号で音声言語を記録するだけでは、書記言語になり得ない。ある種の工夫をされてから言が文になった。それと同様、文から言への復元も何らかの装置が必須であろう。近代以降、西洋文明の伝来によって活発になった口語活動に、演説と講義がある。不特定多数の聴衆に対し、非日常の内容を啓蒙活動の一環として講述することに特徴づけられている。拡声器機の発明と使用により、聴衆の数は、更に増大した。多種多様の聴衆の

耳に、聴解可能な文章を届けるのが言文一致の第一義的な目標であると考ええる。「文→言」は、文章をそのまま口頭で発表し、聴覚によってのみ理解する。筆者は、これこそ問題の核心だと思う。

文章を聴解可能、或いは聴衆を最多にするには、どんな条件をクリアしなければならないか。共通の方言、共通の知識背景、経済的格差に左右されない言語能力、聴解に適した言語形式、内容に見合う語彙などが挙げられる。以下、少し私見を述べる。但し語彙に関しては、次節に譲る。

方言：方言の乱立は、中国の最も大きな問題である。互いにことばが通じ合わない。文章語の発達も方言の障碍を乗り越えるための側面がある。中国では国語統一という運動が起き、学校教育が大きな役割を果たしたが、これもまたいつも方言の保持と矛盾している。王東傑氏は、その著で音声転向について論じている。²²⁾

共通の知識：どんな内容でも理解するには予備知識が必要である。胡適の「典拠を用いず」という主張は、予備知識の平易化と共通化を意識したものである。義務教育の範囲に規定された常識の獲得が次の学習段階における聴解にとって不可欠な要素である。²³⁾

経済格差に左右されない言語形式：これはむしろ作者への要望である。できるだけ平易な文章を書かなければ、経済的な理由により義務教育以上の教育を受けられなかった人は聴覚による理解に困難を伴うであろう。

四、言文一致の語彙的条件

以上、文、言の類別について、分析してみた。以下、それぞれの言語活動と語彙の関係を見ていきたいが、といっても「文」の語彙は、長い伝統があり、この小論で論じられるような内容ではない。本稿では「言」の語彙、特にその形式上の特徴について考えてみたい。

第2節では、劉半農の論文から分かるように、氏は文の類型と語彙の間に必然的な関係があることに気づいたが、詳細に論じることはなかった。

正面から語彙の問題を取り上げたのは当時、北京大学の学生の傅斯年であった。傅斯年は、1918年『文学革命申義』を発表した²⁴⁾。この論文では傅は、文学は、政治、風俗、学術と同じ根源を有すると主張し、文学を他のもの、とりわけ科学と対立させてはいけないと指摘している。傅斯年は、西洋の学者には、科学が進めば、文学が廃れると言う人がいるが、その文学は、古典文学である。人には、時間と精力に限りがあるので、科学に時間をかければ、おのずから古典を顧みる暇がない。その意味では、科学が盛んになり、文学が廃れることは自然の成り行きだ。しかし、今後文学は古典主義を意味するのでなければ、必ずしも科学と反比例の関係ではなく、むしろ同じ方向へ進むことになるだろう。写実派、印象派などは、科学の原理を利用し、その文学を作り出す。故にその精神上の価値は大きいものがある。傅氏は最近科学が中国に入ったが、科学に反対する文学は衰退し、それを利用する文学は必ず盛んになると力説している。

一ヶ月後、傅斯年は、更に『文言合一草議』を発表した²⁵⁾。傅は、「文語を廃棄し、白話を用いるより、むしろ文言を合一させるほうが適当である」と主張している。当時日本語からの「一致」ではなく、独自の「合一」という用語を用いた。傅氏は、「文語を廃し、白話を用いること、深く信じ、疑う余地もない」としながら、胡適、錢玄同らの文言を捨て、白話に改めるとの相違も見せている。傅氏は、これから使用する白話は、白話をベースに文語の優れたところを取り、不足を補い、統一した言語ツールにすべきだ。白話を素地とするが、文語の語彙でその不足を補うと具体的に提案した。両者を合一させるステップとして、傅斯年は十箇条の規定を提示した。

第1-4項は、文語の代名詞、前置詞、感嘆詞、助詞をやめ、白話のそれを用いるとしている。機能辞の類いは、白話にも過不足なく存在し、文語の遺物を使う必要がないからである。第5項は、一切の名詞、形容詞、動詞、副詞は、意味が違わなければ、白話をもって文語に取って代わる。例

例えば、食→喫、飲→喝、嬉→玩などである。それは、文語の語を聞くより、白話のほうが心象が鮮明だからであるという。傅氏の「心象」は、ソーシャルの聴覚影像だと思われる。但し、当時では「食、飲、嬉」などはもはや語ではなく、拘束形態素に成り下がったと言えよう。よって第5項は、実際意味をなさない。語彙の文白転換は、語彙能力を測る重要なパラメーターで²⁶⁾、当時の国語教科書では、その訓練に多くのスペースを割いている²⁷⁾。

第6項では、語彙の区別性が取り上げられている。傅斯年は、「文語にはあるが、白話にはない、文語では区別できるが、白話でははっきりと区別できない」という現象に言及した。19世紀末、20世紀初頭、宣教師を含め、白話の語彙が貧弱で、文語にはとても及ばないと考えられていた²⁸⁾。前述したとおり、章太炎、劉半農もこの問題を言文一致実現の障碍と考えていた。漢字革命を主張した錢玄同も「白話の語彙が少なすぎる。文法も整備されていない。文言の長所を取り入れ、1つの国語に仕上げていくのは並大抵のことではない」と嘆いている²⁹⁾。「五四」新文化運動以降、二字語の増加によって、口語語彙の貧弱性がようやく解消された³⁰⁾。

第7項は極めて重要である。傅斯年は、言文一致を実現するには、名詞だけではなく（傅氏はここに一般名詞の例を挙げているが、学術用語のほうがもっと重要である）、動詞、形容詞、副詞等の不足も深刻であると指摘している。傅氏が例語として挙げた二字語は、後述するように殆ど1919年五四新文化運動以降、広く一般に使用されるようになったものである。傅氏は、「不足ならば、躊躇なく文言の語をもって補う。状態、形状を表す語は、俗語より文語のほうがよければ、文語の語を使う。例えば、「高明」「博大」「莊嚴」などである。俗語を用いれば、意味、情緒が大きく損なわれる。なぜならいまの白話は素朴すぎるからである。状況描写を司る語は、美しさや上品さが必須である。質素な俗語にはそれがない。俗語で置き換えると趣きを失う。つまり白話の形容詞は非常に貧弱で、補充が急務であ

る。文語の語をもって補うという主張から、傅斯年が意識している資源は、中国の古典であることが窺える。

第7項を踏まえ、傅氏は、第8項で「同じ意味を表すのに、白話が一字数語であって、文語が二字語であるなら、文語の語を採用する。文語が一字数語であって、白話が二字語であるなら、白話に従う」と提案している。その理由について、傅斯年は次のように述べている。

中国の文字は、一字一音、一音一義で、しかも同音の字が多い。多いものは、一音で数百字もある。同音の字が多いため、口頭では理解しにくく、更に一字を付け加え、理解を助ける。(中略)一字で表現できるのに、必ず二字語を使うのは、単音節を避けるためである。複合語が多くなり、一字語が減っていくのは、自然の成り行きで、人の好き嫌いによるものではない。いま、文語と白話を二字語1つに融合させるのは、口頭と書面の両方において便利だからである。一字語を二字語に置き換えることにより、書けば理解でき、言えば聴解できる。従って一語をできるだけ減らし、二字語をできるだけ増やす。こうして初めて口頭で表現する時、聴いて理解できるのである。

つまり、白話にせよ文言にせよ、できるだけ二字語を使うことである。このように一字語を二字語に言い換える必要が生じた。これは、見ても分かるし、聞いても分かるためである。筆者は、現代中国語の語彙体系に「単双相通の二字語原則」が存在していると前から主張していた。これは、言文一致を実現する語彙上の先決条件であると考え。更に言えば、言文一致はまず科学叙事の問題であって、文学の問題ではない。小説は読むためのものであって聞くためのものではないからである。教室での授業のみ聴解の必要があると考えている。

傅斯年のこの文章には多くの重要な指摘があった。時間的に見ればその

師、胡適の『建設的文学革命論』よりも早い。異なるのは、傅斯年の問題意識は言語面の対応で、胡適は文学的な方法である。

胡適の『文学改良芻議』が発表されてから大きな反響を呼んだ。但し議論の多くは、「典拠を用いない」によって象徴されている白話文学と言文一致に集中している。1年後、胡適はまた『新青年』に『建設的文学革命論：国語的文学，文学的国語』を発表した³¹⁾。八項目の主張は4つのすべきことに改められた。即ち、「一、言いたいことがある時だけ言う。これは、無味乾燥な文章を書かないという主張の言い換えである。二、言いたいことだけを言う。そして普通の言い方で言う。これは、二、三、四、五、六の言い換えである。三、自分のことばで言い、他人のことばで言うてはいけない。これは古人のまねをしないことの言い換えである。四、時代に合うことばで言う。これは、俗語俗字を忌諱しないことの言い換えである」とある。以上のような前置きをしてから胡適は文章を趣旨を次のように述べている。

わたしの「建設的新文学論」は唯一の趣旨は十文字にすぎない。つまり「国語的文学，文学的国語（国語による文学、文学的な国語）」である。我々が提唱した文学革命は、中国のために国語による文学を作り出すことである。国語による文学があればこそ、文学的な国語が可能である。文学的な国語があれば、我々の国語は本当の国語と言えるのである。国語には文学性がなければ命がなく、価値もなく、成り立たないし、発展もできないということである。

「国語」は、「文言」に対峙する概念であり、古い白話、或いは官話とも区別されるもので、即ち新時代の白話である。胡適の趣旨は、文学は国語によって書かなければならず、それと同時に、国語も文学性を有しなければならない。胡適は、文学と新しい時代国語の共存共栄の関係を強く意識

していた。胡適本人のその後の学術研究と創作実践の相当な部分も正にこの二点をめぐって行われた。

胡適の友人で、遠くアメリカにいた朱経農は、胡適の主張に対し、1918年6月5日に新文学と言語の関係に関連し、文言と白話の問題を取り上げ、次のようなコメントをした³²⁾。

わたしは、白話で作文することに反対するのではないが、但し「文学的な国語」は、文言にせよ、白話にせよどちらかを排除するのではなく、その両方の長所を取り入れるべきである。指摘しておかなければならないのは、文学的な国語は、白話でも、文言でもないということである。文言のエッセンスを吸収し、白話の老廃物を捨て、教養の程度に関係なくみんな楽しめる「生きた文学」を形成していくことである。端的に言えば、文言のみ用い、白話を排除する、或いはその反対、白話のみ用い、文言を排除するという主張は、いずれも偏った見解である。

つまり、朱氏も「文言廃棄」に反対し、両方のよい点を取り入れると主張した。朱氏のコメントに対し、胡適は、次のように答えた。

いわゆるエッセンスや老廃物は非常に曖昧なことばである。わたしが主張している「文学的な国語」は、即ち今日の中国で比較的最も普通の白話である。このような国語は、文法、語法はすべて白話の文法、語法を用いるが、必要な時、いつでも文言にある二音節以上の語を取り入れてもよい。このように、白話の文法、語句に白話の語彙になりうる文語の単語を加える、ということである。³³⁾

つまり胡適は、全面的に白話の文型と言葉遣いに従うが、文言にある二

字語を躊躇するなく取り入れるということである。文言の二字語は白話の語彙に生まれ変わる可能性が非常に大きいとの含意である。胡適の主張は2つのことを意味する。1つは、二字語は言文一致を目指す新しい国語にとって語彙上の必須条件である。いま1つは、文言は、二字語を提供できるということである。朱経農のコメントは一字語、二字語のことに触れているわけではないのに、胡適の返事は聊か唐突さも感じる。実は、胡適も早くから文字数の問題に気づいたのである。漢字改革に関する討論の中で、胡適は文言の中に一字語が多すぎて、ローマ字化が絶対できない、だからまず文言の語彙を白話の語彙に変えて、その後、白話の語彙をローマ字に変換すると述べている³⁴⁾。1919年12月に発表した『国語的進化』において、胡適は更に「一字語が二字語に変わることは、中国語の大きな進化である。(中略)白話は、会話の必要から、二字語が多い。いまの白話は、会話や講演に間に合い、社会生活の媒介となり得るのは、他ではなく、一字語が減り、二字語が増えることに負うところが大きい。現在注音字母が使えるのもそのためである。将来的に中国語は、ローマ字を採用できるかどうかもう二字語にかかっている」と指摘している³⁵⁾。胡適は二字語は白話の重要な特徴だと考えているのである。ところで、白話の語彙になり得る文言にある二字語は、名詞か、動詞か、それとも形容詞か。この点について、胡適は、問題にしなかった。中国の古典からいとも簡単に手に入れることができるか。或いは角度を変えて、現代中国語において文言から来た二字語がどんなものがあるか。これは、董秀芳が言ったように「語彙化」の結果なのか³⁶⁾、それとも当時の作者たちは直接文言から取り入れたのか。近代以降、日中間の言語接触及び知識の移動に伴った語彙の交流は、日本語と中国語に大きな影響をもたらした。学術用語以外に他の分野の語彙は、例えば二字の動詞、形容詞などにも波及したのか、研究が待たれるところである。

16世紀以降の西学東漸において、近代的知識の伝達、つまり科学叙述の

関係は、文学のそれと比べれば、明らかにもっと広く、もっと深い。筆者は、まず国語による科学があって、その後、国語による文学がある。そして、科学的な国語も文学的な国語より先に発生したのではないかとさえ考えている。こうすれば、問題は、如何に中国語で科学を語るか、それが19世紀末20世紀初頭では可能かに帰結する。中国語は、どのように明晰性と論理性を確立したのか、それと同時に科学研究の対象となったのか。筆者は、この時期の中国語が科学を語れるかという問題について考察したことがある。紙幅の関係でここでは詳細には立ち入らないが、結論を言えば、19世紀末20世紀初頭の中国語は、おおよそ以下のような問題があるため、まだ科学を語るができなかったと思われる。

1. 学術用語がまだ整備されていなかった；
2. 学術用語がまだ厳密に定義されていなかった；
3. 科学叙事の文体がまだ確立されていなかった；
4. 中国語そのものの問題、例えば二字語が不足していた；
5. 体言と用言の品詞転換がまだ自由に行えなかった；

詳細は拙著『一名之立旬月踟躕：厳復訳詞研究』と『漢語近代二字語研究』を参照されたい。要するに上記の問題は、二字語によってしか解決することができない。

文学の文と応用の文では、それぞれに独自の語彙があることは、容易に想像できる。科学叙述及びその聴解実現には、次のような2種類の語彙が必要になってくる。

- 内容新語：内容からくる語彙の問題：術語
- 形式新語：形式からくる語彙の問題：叙述語

前掲の拙著では、二字語をどこから調達したかについて詳細に検証した。

江戸中期以降の蘭書翻訳は、すでに語彙面において日本語に影響を及ぼした。しかし、翻訳の基調は、漢文、或いは漢文調であったため、日本語そのものへの影響は限定的であった。明治期に入ってから、全面的に西洋の近代的知識を受容する必要から蘭学で一定の成果を上げた自然科学に加え、人文科学の翻訳も盛んに行われるようになり、語彙がかつてないほどの急増ぶりを見せ、日本語は大きく変容した。語彙体系の近代化には、学術用語の創出と叙述語の整備という二つの側面がある。明治初期の新語は、学術用語が中心であり、創出するに当たって、「新しい概念は、二字漢語で表現（或いは訳出）する」という原則が貫かれた。新語の殆どが漢語形式を取る所以である。また学術用語は、科学叙述の性質上、厳密に定義を施し、異形を極力排除することが求められる。即ち学術用語の統一である。筆者はこれを仮に学術用語の「一物一名」の原則と呼ぶ。

一方、叙述語とは、科学叙述の枠組みを担う語で、動詞、形容詞が務める。叙述語は新しい概念を表すものもなくはないが、既存の和語等に同義関係を持つ漢字語を提供するのを目的とする語がかなりの比重を占めている。筆者は、これを「和漢相通」の現象と呼ぶ。「和漢相通」は、近代以降の語彙現象として、その動機付けには主に以下のようなものがあるのではないか。

一、主に言語社会の変化、特に異文化・異言語との接触によってこれまで存在しなかった、或いは区別しなかった状態、事態を表し、精密に区別する必要性が生じた。例えば「敏感、過敏」「駐在、滞在；駐車、停車」などである。明治後期に大量に発生した「-的」付きの語がこの延長線上にある。

二、これまで漢文脈、和文脈と峻別された文体が、新たに和漢混淆文体へと成立していく過程で、文体的統一性を与える必要性が生じた。例えば同義の和語がすでに存在しているにも拘わらず、「簡単、優秀、正確」；「援

助、拡大、期待」などが新作される。

三、近代学校制度の確立により、教育が普及し、漢字だけではなく、英語の知識も一般民衆へと浸透していく。そのため、紋切り型の表現に満足せず、言語表現の多様化を追求する必要性が生じた。これは同義語群の発達に繋がる。例えば「優れる、優秀、拔群、卓越；大切、大事、重要」などの場合である。

これまでに一と二について、考察、言及があるが、三に関しては、少ない。ここで三について少し説明したい。言語には「達辞」と「行遠」の二つの側面がある。孔子曰く、辞は達するのみ（辞達而已矣）；亦曰く、之を言うに文無くば、行われて遠からず（言之無文、行之不遠）。荀子にも同じ言説がある。「行遠」のための一手段は、同じ概念を異なる語で表すことである。つまり「一物多名」である。「一物多名」には意味的な動機付けがないが³⁷⁾、言語は基本的に「一物多名」でなければならない。

学術用語にせよ、叙述語にせよ、核心は漢字語である。そして二字語の場合が圧倒的に多い。明治期の新漢語には、ア) 意味の空白を埋めるものとイ) 既存の和語と同義関係をなし、同義異形語を提供するものとの二種類がある。アは、上記の一に当たり、イは、上記の二、三に当たる。どちらが多いかはまだ統計を見ないが、例えば、中国では戦国時代の後期（BC. 3世紀）から一と二、三との比重が逆転した³⁸⁾。日本でも明治以降の教育の普及により「一物多名」に更に拍車がかかったと思われる。

西洋の近代的知識を導入するにあたり、叙述語の整備は、学術用語ほど緊急性を要していなかったが、ないがしろにすることができない。田中が一連の研究で取り上げた「つとめる・努力」「優れる・優秀」「助ける・援助」「広げる・拡大」などは、和漢相通が実現された結果だと認識する必要がある³⁹⁾。

明治10年代後半、重要な英和辞典、各分野の学術用語集が一応出揃い、学術用語の整備が一段落したと見て良い。この時期に2つの動きが現れた。

1つは、言文一致運動の機運がこれまでなく高まったこと、もう1つは、サ変動詞語幹と漢語形容動詞が急速に近代書記言語に進出したことである。言文一致運動について、文学の側面から捉える向きが多いようだが、これは、同時に科学を語るための科学叙述からの要請である。

以上を簡単に纏めれば、近代以降、西洋の新概念を導入するために、學術用語が数多く創作された。學術用語には、二字漢語が多く、また統一させる必要もあった。學術用語の創作が一段落すると、叙述語の問題が持ち上がった。これまでの和語系の動詞、形容詞に対し、同義の漢語の叙述語を新たに用意しなければならない。和漢相通である。なお、1つの和語に対して、漢語系の叙述語が常に複数で用意される。これは、精密描写や文体の統一性と表現の多様性のためである。強調しておきたいのは、漢語系叙述語の多くは、必ずしも意味上の動機付けが存在しない。和漢相通の結果として、同義語群がこれまでになく発達した。

五、結び 東アジアの共通課題

1891年（明治21年）、『言海』の刊行が完了した。この日本最初の近代的国語辞書と言われる辞書に、漢語が13546語収録されている（和語21817語。42.57%；全語彙数39103語、34.64%）。『言海』を皮切りに一連の国語辞書が出版された⁴⁰。40年後の1931年、『言海』の改訂版として『大言海』が世に送られた。漢語が37042語となり、23496語が増加した。現代日本語漢字語の基礎がほぼ『大言海』で固められたのである。漢字文化圏において、近代語彙は日本語の影響を強く受けた。その経路は、主に辞書・用語集と翻訳書であった。『物理字彙』（1908）『普通・専門科学日語辞典』（1908）『英華大辞典』（1908）から『辞源』（1915）までどれも日本の辞書・用語集に負うところが絶大である。一方、翻訳書では、新概念を表す術語類は、辞書によって解決することが多いが、叙述語に関しては、持ち合わせの語彙を訳文に使うと推測される。特に原著が日本語の場合、叙述

語は中国古典との連続性が強く、訳者による拒絶反応が少ない。そのため問題視されることもなかった。

科学叙述に特徴付けられた言文一致に貢献した二字漢語の整備は、『言海』（1888-1891）を起点とし、『大言海』（1931）を完成の到達点と考えるなら、その間、何が起きたのか、学術用語、叙述語にわたってその発生（語源）から、現代日本語語彙体系への編入までの全過程、ひいては、漢字文化圏に拡散していく全容の解明が待たれるところである。

付記：本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金：基盤研究C「中国語の近代“国語”への進化に関する総合的研究：欧化文法と日本語の影響を中心に」（平成22-24年度、研究代表者：沈国威）；基盤研究C「現代中国語への道程：語彙二字語化における外部誘因、特に日本語の影響に関する研究」（平成27-29年度、研究代表者：沈国威）；基盤研究C「漢字文化圏における二字漢語動詞と形容動詞の発達と交流に関する総合的研究」（平成30-令和2年度、研究代表者：沈国威）による成果の一部を含んでいる。なお、執筆に当たって、大阪大学の田野村忠温先生より貴重なご指摘を賜ったことを記して感謝を申し上げる。

注

- 1) 中国では、黄遵憲の詩にある「我手写我口（わたしは自分の言うことばを書き記す）」は、話すように書くという革新的な主張と解釈されているが、これは黄氏の趣旨ではない。黄遵憲『雑詩・雑感』（1872頃か）に「俗儒好尊古，日日故紙研；六經字所無，不敢入詩篇。古人棄糟粕，見之口流涎；沿習甘剽盜，妄造叢罪愆。（中略）我手写我口，古豈能拘牽！即今流俗語，我若登簡編；五千年後人，驚為古爛斑。」とあるように（黄遵憲著・錢仲聯箋注『人境廬詩草箋注』上海古籍出版社、1981年42頁）、詩文にそれぞれの時代の語彙が使えない現状への不満を言っているのであって、言文一致とは、無関係である。当時桐城派の人たちは、「排斥闖入之詞」、つまり由緒のある言葉以外のものを詩文に使ってはいけないと強く主張していた（沈国威『一名之立旬月踟躕』社会科学文献出版社、2019年239-254

- 頁)。本多勝一も「文章は決して話すように書くわけにはいかない」と言っている。『日本語の作文技術』朝日文庫、2015年12頁。「出口成章」は、不可能ではないが、相当の訓練が必要である。
- 2) 国語辞書の収録状況から「聴解」は、語として必ずしも熟していないようだが、本稿では、聞いて分かるという意味で用いる。
 - 3) 田中牧郎「雑誌『太陽』創刊年(1895)における口語文——敬体を中心に」、飛田良文編『言文一致運動』明治書院、2004年79頁；小林弘忠「言文一致と新聞文章」、同上304頁。
 - 4) 胡適の文学革命八事：「一曰不用典。二曰不用陳套語。三曰不講对仗（文当廢駢，詩当廢律）。四曰不避俗字俗語（不嫌以白話作詩詞）。五曰須講求文法之結構。此皆形式上之革命也。六曰不作無病之呻吟。七曰不摹仿古人語，語須有个我在。八曰須言之有物。此皆精神上之革命也。」正式発表の際、項目の順番が変わったが、内容は同じである。
 - 5) 当時、「文学」は、literature と philology の2つの意味を持っている。
 - 6) 章太炎『文学総略』、『章太炎全集・国故論衡先校本校訂本』、上海人民出版社2017年、47頁、49頁。校校訂に「文即詩賦、筆即公文」とある。221頁。なお『国故論衡』は最初1910年日本の秀光社によって刊行された。
 - 7) 胡以魯は、東京大学博言科に留学し、上田万年に師事した。沈国威『漢語近代二字語研究』華東師範大学出版社2019年3-4頁を参照。
 - 8) 胡以魯『国語学草創』（1913）123-124頁。
 - 9) 陳独秀『文学革命論』、『新青年』第2巻第6号、1917年2月1日。
 - 10) 錢玄同から陳独秀への書簡、『新青年』第3巻第1号、1917年3月1日。
 - 11) 劉半農「我之文学改良觀」、『新青年』第3巻第3号、1917年5月1日。
 - 12) 即ち章太炎の主張。前掲章太炎『文学総略』参照。
 - 13) この点については、劉氏の解釈は孔子の趣旨と違ったようだが、但し応用の文章は、必ず口頭で表現でき、また聴解できるものでなければならぬと理解すべきか。
 - 14) 章太炎も口語と文章の相違に言及したことがある。『訂文』重訂本において「言語、文学、厥科本異，凡集録文辭者，宜無取焉。戰國陳説，與宋人語録、近世演説為類，本言語、非文学也。效戰國口説以為文辭者，語必僞俗，且私徇筆端，苟炫文彩，浮言妨要，其傷実多。唐杜牧、宋蘇軾，便其嘩囂，至今為梗。故宜溝分畛域，無使兩傷。文辭則務合休要，口説則在動听聞，庶几各就部伍爾。」また「文辭者，亦因制其律令，其巧拙則無問。」とも述べている。但し「言語、文学」の区別に關するこの指摘は、初刻本になく、また第3稿『檢論』においてすべて削除された。

『章太炎全集・楮書初刻本、楮書重訂本、檢論』229頁、233頁。

- 15) 陳独秀は、劉文に対するコメントでは、「劉君が定めた応用文と文学の定義では、わたしの見解とそう違わない。わたしの趣旨は、すべて文字で書かれたものを文と呼び、文には、二大別で、応用の文と文学の文という。劉君は詩歌、戯曲、小説を文学とし、これは即ちわたしが言う文学の文で、評論、布告、日記、書簡などは、文字、即ちわたしが言う応用の文である。「文字」と「応用の文」は、名称が異なるが、実質的には相違がない」と述べている。
- 16) positive sciences、即ちコントの positive stage であり、今中国語では「実証的科学段階」と訳している。
- 17) 章太炎は、古典の語彙は現代語の語彙より区別性が高いと主張している。(『章太炎全集・楮書初刻本、楮書重訂本、檢論』217-218頁) これに対して胡適は「(章先生)の主張は丁寧な研究の結果ではない。古典語こそ意味が曖昧で、多岐にわたるケースが多いと反論している。(胡適『国語的進化』、『新青年』第7巻第3号、1920年2月2日、9頁)。

- 18) 文学の文と応用の文に関する討論は、北京大学関係者の間で一定のコンセンサスが得られたようである。総長を務めた蔡元培は、自伝の中で「わたしは、応用の文は、国語(口語文、引用者)を使用することには大賛成である。美術の文に関しては、新旧の文体はいずれも美学的な価値があると考えている。新しい文体は西洋の建築、彫刻、絵などを表現するもので、科学、哲学に従って進化する。古い文体は、音調の配置や対句に重きを置き、音楽、舞踏、図案や中国の絵画に用いられる。いずれも美術の文と言えよう。」と主張している。(『伝略(上)』1919年8月、『蔡元培全集』中華書局1984年第3巻333頁) 蔡氏の「美術文」は、つまり「文学の文」であろう。

蔡元培は、さらに女子学校での講演の中で「わたしは、口語文が必ず勝利すると断言できる。但し、文語が絶対に排斥されるかと言うと、まだ疑問である。わたしの観察では、今後応用の文は、必ず全部口語文を使うが、美術の文は、その一部は文語を使い続けるであろう。というのは、応用の文は、記述と説明の二つの役割がある。前者は目にした自然現象や社会経験を他の人に伝えるもので、後者は目にした真偽、善悪、美醜の道理を他人と議論するものである。分かりやすく、的確さが求められ、新たに色彩を付け加えなくてもよい。だから口語文は向いている。」と応用の文の特徴を指摘している。(『国文之将来』1919年11月17日、『蔡元培全集』第3巻356-359頁)

翌1920年の講演の中で蔡氏は応用の文と美術の文について次のように述べている。(『論国文的趨勢及国文與外国語及科学的關係』1920年10月北京高等師範学校国文部での講演、『蔡元培全集』第3巻455-460頁)

文章には二つの種類がある。一つは実用の文章で、文明が開けていない時、生活上の必要によって発生する。もう一つの美術の文章で、生活上の必要性がないが、文明が開けた時、なくてはならない。

実用の文章はまた二種類に分けられる。一つは説明できなものである。例えば同じ道理に対して、わたしの見解は人と違うとき、文章にして公表する。或いはある出来事について、より良い方法を求め、みんなで討論する。或いは、自分が知っている事柄をまだ知らない他の人のために文章で発表する。学校の講義はこの例である。いま一つは記述である。例えば自然界や社会の現象について、文章で記述する。科学的な記録やその他の事実を記録する文章はこれになる。

美術の文章もまた二種類ある。一つは情のあるもので、いま一つは非情なものである。それぞれに詩や歌、社交的なもの、寿序、墓誌銘などがある。

学生諸君はこれから学問を研究したり、社会に出て仕事をしたりするので、実用の文章を教えなければならない。つまり学生が習う国文は実用の文章を主とするべきである。文体が口語文か文語文かと言えば、いろいろな事情により、口語文を主張しないわけにはいかない。

ただしこのような応用の文と文学の文に関する議論は、北京大学以外に広がらなかったようである。

- 19) 本多勝一は、「詩歌、純文学、随筆、大衆小説⇔論文、評論、解説記事、新聞記事」の順で文学的から事實的へと移行すると言っている。(本多勝一『日本語の作文技術』、朝日文庫、2015年版10頁。
- 20) 『辞源』序文に「癸卯甲辰之際、海上訳籍初行、社会口語驟変。報紙鼓吹文明、法学哲理名辞稠迭盈幅。然行之内地、則積極消極内籀外籀皆不知為何語。」とあるが、正に20世紀最初の十年代の新旧断絶の有り様である。
- 21) 『聖諭広訓』のような「宣講」が広範囲、長期間に行われた。
- 22) 王東傑『声入心通：国語運動與現代中国』、北京師範大学出版社、2019年。
- 23) 常識とは、ある社会で、人々の間に広く承認され、当然もっているはずの知識や判断力である。『哲学字彙』(1881)に英語 common sense の訳語として初めて採用、中国語にも伝わった。沈国威・内田慶市編著『近代啓蒙の足跡』関西大学出版部、2002年。
- 24) 傅斯年『文学革命申義』、『新青年』第4巻第1号、1918年1月15日。
- 25) 傅斯年『文言合一草議』、『新青年』第4巻第2号、1918年2月15日。
- 26) 沈国威『漢外詞彙教学新探索』、関西大学中国語教材研究会刊、2014年。
- 27) 沈国威「関于清学部編『簡易識字課本』(1909)」、『清代民国漢語研究』、韓国：

- 学古房, 2011年 209-233頁。
- 28) 沈国威「西洋人記録の世紀之交の新漢語」, 『関西大学東西学術研究所紀要』第42輯 2009年 101-111頁。
- 29) 銭玄同『中国今後之文字問題』、『新青年』第4巻第4号, 1918年4月15日, 第353頁。
- 30) もう1つの状況は、言語使用者は、異なる語で同じ、或いは近い意味概念を表すことである。例えば、妻、家内、女房、連れ合い、伴侶、愚妻などは、使用頻度において差があり、使用頻度が低い語が、文語的で、概念的意味以外に修辭的意味も有する。口語の語は、よく修辭的機能がないと言われる。
- 31) 胡適『建設的文学革命論：国語の文学、文学的国語』、『新青年』第4巻第4号, 1918年4月15日。
- 32) 朱経農への胡適の書簡「通信」, 『新青年』第5巻第2号, 1918年8月15日。
- 33) 『新青年』第5巻第2号, 1918年8月15日。強調記号は、筆者による。
- 34) 胡適『中国今後之文字問題』附言, 『新青年』第4巻第4号, 1918年4月15日, 356-357頁。
- 35) 胡適『国語的進化』、『新青年』第7巻第3号, 1920年2月2日, 7-8頁。章太炎も「是皆兩義和合, 並為一称。苟自西方言之, 亦何異一字邪? 今通俗所用, 雖塵跂二千, 其不至甚憂困置者, 固賴此轉移爾。」と言っている『章太炎全集・楮書初刻本、楮書重訂本、檢論』、211頁。
- 36) 董秀芳『詞彙化：漢語双音詞的衍生和發展』修訂本、商務印書館、2011年。
- 37) 周辺の意味、コロケーションの相違があるとしても後天獲得的なものであろう。
- 38) 沈国威「我們為什麼需要二字詞?」(『東アジア文化交渉研究』第10号、2017年 101-118頁) 参照。沈はこの論文では、二字漢語は、新概念の命名、細分化のみならず、「同義異形」の語を多数提供できる特徴があると論じている。
- 39) 田中牧郎、「「努力する」の定着と「つとめる」の意味変化」(『日本語辞書学の構築』、倉島節尚編、おうふう、2006年 223-238頁)；田中牧郎、『近代書き言葉はこうしてできた』(岩波書店、2013年)；田中牧郎、「近代新漢語の基本語化における既存語との関係——雑誌コーパスによる「拡大」「援助」の事例研究」(『日本語の研究』第11巻2号、2015年 68-85頁)；田中牧郎、「明治後期から大正期に基本語化する語彙」(『日本語語彙へのアプローチ』、斎藤倫明・石井正彦編、おうふう、2015年 234-250頁)；田中牧郎、「近代における「期待」の基本語化——雑誌コーパスによる記述」(『国語語彙史の研究 35』、和泉書院、2016年、1-21頁)。
- 40) 主要なものに『日本大辞書』(山田美妙 1894)、『日本大辞林』(物集高見 1894)、『日本新辞林』(林甕臣ほか 1897)、『ことばの泉』(落合直文 1898-1899) などある。